

フェミニズム的諸文脈からの 「女性によるポルノグラフィ消費」観 ——大衆雑誌記事におけるトレンドの変遷——

荒木 菜穂
ARAKI Naho

はじめに

現代においてポルノグラフィへの批判は、主に「わいせつ」と「女性差別」の観点から行われている。女性差別としての批判は、フェミニズムの文脈において行われていることが多い。しかし、フェミニズムには様々な立場があり、そこではポルノグラフィの否定だけでなく、対立するものも含めたいくつかの態度が見受けられる。

昨今のポルノグラフィめぐる状況においては、ポルノグラフィは男性のみが消費し女性はそれによって差別されるという構図自体にも変化が見られ、女性もまた積極的なポルノグラフィの消費者となるという現象も起こっている。

本稿の目的は、フェミニズム的諸立場のうち、日本における「女性によるポルノグラフィ消費」の現象の説明にもっとも適した視点を明らかにすることである。そのため、「ポルノグラフィを消費する女性」に関する大衆雑誌記事におけるフェミニズム各論の文脈に該当するカテゴリーの出現傾向の整理を行う。それらの作業を通し、「女性によるポルノグラフィ消費」が、日本社会における男女関係にとって持つ意味についての考察を行いたい。

1 フェミニズム各論における ポルノグラフィに関する言説

(1) ラディカル・フェミニズム

ラディカル・フェミニズムは、従来私的な領域とされていた家族や性愛などの個人生活を政治的な議論の場に持ち込み、それらの中にある、社会的な男女のあり方を規定する男性優位主義を「家父長制」と名づけ、これを本質的な社会的抑圧の形態であると位置づける。

一般的に、「フェミニズムはポルノグラフィに反対している」というときのフェミニズムとは、厳密にはこのラディカル・フェミニズムを指す。男女の私的な性関係に性差別の根本要因を見出すラディカル・フェミニズムにおいて、ポルノグラフィは「性差別的な性表現」として定義される。「性差別的な性表現」とは、女性への暴力を描くもの、犯す男性／犯される女性というパターンに内在する支配／従属関係を描くもの、女性を性器など部分化された存在として「モノ」化して描くものと説明される。

女性がポルノグラフィを消費する立場にもなるという状況はラディカル・フェミニズムにおいて、男女の置かれた立場の差や現実の危険を無視してポルノグラフィを擁護することにあたるとして、反フェミニズム的であるとされる (MacKinnon 1990)。また、ポルノグラフィの普及は、女性差

別的価値観の日常化である（ホーン川嶋 1996: 21）といわれるが、その消費により男性支配的価値観を女性が内面化することは、彼女が男性にとって都合のよい存在となることを意味する。さらに女性のマスターベーションが、男性による性的消費の対象として語られてきた（金塚 1996）ように、ポルノグラフィを消費する女性が、性的な欲望を持つ存在として男性に回収されることも考えられる。

また反対に、「男性による女性支配」という性関係において、女性によるポルノグラフィ消費は男性から批判されうる現象であるとも想定される。この意味では、現象が男性への反逆の側面をも持つが、ラディカル・フェミニズムの文脈においてはこのような側面からの肯定はあまりなされず、先述のような男性優位的価値規範への共犯（笠間 2001）の側面が強調されることが多い。

(2) リベラル・フェミニズム

公的な領域の平等を求めるリベラル・フェミニズムにおいては、私的領域である性における権力関係は問われない。ここでポルノグラフィはまず、フェミニズムとしてではなく性規範からの解放一般として肯定される（ホーン川嶋 1999）。リベラル・フェミニズムにおいては、女性のセクシュアリティは社会構築的なものではなく、自然主義的な、男性の場合と同様、女性自身でコントロールできるものと位置づけられる（MacKinnon 1990）。また、ラディカル・フェミニズムの求めるポルノグラフィの規制については、女性を性的に保護を必要とする弱い存在と位置づけている（Paglia 1990=1995）として批判する。

リベラル・フェミニズムにおいてポルノグラフィとは家長制的性規範からの解放、すなわち性解放の一側面を意味する。ここでは、ポルノグラフィには、女性にとっての「危険性」とともに

「性的快楽」の側面があり、むしろ後者の側面から女性にとってのエロティシズムをどう考えるかの視点が必要なのではないか、との主張がなされる。

リベラル・フェミニズムにおいて女性によるポルノグラフィ消費は男と同じ文化の享受を意味し、またその権利の主張としての意味も大きい。当然、男性と同様の権利を女性が持つことを好ましいこととしない社会においては何らかの反発も想定されるが、むしろここではポルノグラフィにたいし女性が肯定的になり、これまで男性の領域とされてきた女性のセクシュアリティの側面を自らのものとすることで、男性支配の文化に対し反逆が試みられる。

(3) エロティカ派

一方で、ラディカル・フェミニズムによるポルノグラフィ批判においても、性表現の全てを女性差別としてのポルノグラフィと扱うことへの疑問が一部で持たれるようになる（Steinem 1978）。1980年代のアメリカでは、ポルノグラフィを批判し、性行為以外のものによっても女性が性的悦びを受けているという事実ほとんど注意が払われていなかったラディカル・フェミニズムの状況に対し、エロティックなイメージによって得られる楽しみの擁護と、女性の手による、暴力的でない「よいポルノグラフィ」すなわち「エロティカ」を創造しようという動きが登場する。

この立場はラディカル・フェミニズムの一部として登場したため、同様に既存のポルノグラフィを女性差別的表現であると位置づけるが、性表現における女性の客体化、「モノ」化については差別的であるものと、美術作品のようなそうでないものとに区別する（Myers 1987=1992）。どのような表現がエロティカであり、またはポルノグラフィであるかについては意見が分かれるが、一般に

エロティカとは、人間的なセクシュアリティの悦びと、そこから生まれる安心感のようなものを表現し、愛などの関係性を排除しない性表現であるとされる。

エロティカ派にとって女性がポルノグラフィを消費することとは、女性固有の非暴力的性表現であるエロティカを消費することである。平等な男女の関係というフェミニズム的な目標に向かい、エロティカ派の目指すところとは、新しいセクシュアル・イメージを通じ、自分自身のセクシュアリティをコントロールし、男女の関係を変えること (Steinem 1978) であり、またそれによって既存のポルノグラフィを駆逐すること (加藤 1998: 180; 渡辺 1992: 288) であるといえる。しかし、一方で先述の男女の差異の絶対化やセクシュアリティの階層化といった問題も残る。この点については、エロティカ概念の初期の提唱者であるスタインエムの述べている、女性がセクシュアリティを自らのものとするのが可能になるような性情報 (Steinem 1978) という意味に立ち返り、積極的な意義を持つ性表現のさらなる探求が望まれる。

2 1990年代の大衆雑誌における「女性によるポルノグラフィ消費」観の整理——資料選択・分析方法

日本における今日的状況において女性がポルノグラフィを見るという現象は、その普及は男性向けには遠く及ばないとしても、もはや驚くべきことではないとされている。本章では、ポルノグラフィという要素を持った女性向け性メディアであるレディース・コミックの登場から、その普及やジャンルの広がりに至るまで、その現象がどのように語られてきたかについて、1章で扱ったフェミニズムの各文脈に沿って見ていきたい。

大衆雑誌記事は、1980年代半ばから1990年代、2000年を扱っているが、ほとんどが1990年

以降に集中している。1990年代半ば以降の日本における女性のセクシュアリティをめぐる状況は、消費社会における欲望の増大との関わりで論じられることの多い1980年代女性の「性解放」を引き継ぐ側面を持つ一方、「前のどの時代とも不連続な状況 (小形 2000)」であると言われる。1980年代との連続性がまだ残るであろう1990年から、大きく変化があったとされるそれ以降にかけての「女性によるポルノグラフィ消費」にたいする社会のまなざしを追っていくことで、現代における女性のセクシュアリティとそれを取り巻く状況を明らかにしていきたい。

(1) 時期について

分析の対象の時期として1984年から2000年を扱ったが、1984年については、データベースの検索で最初の記事が年であったからである。

この1980年代半ば以降の女性とポルノグラフィの関係は、戦後日本における性的な娯楽の質の変化、また女性のセクシュアリティの変化を背景に説明することができる。

戦後日本社会において、性風俗産業は国家による「囲い込み」により一般社会と区別されていた (永井 1995: 76) が、ポルノグラフィの販売、掲載にも法にもとづく空間規制が設けられている欧米諸外国と異なり、日本ではこのような規制は、メディア状況の変化によって限界を迎える。ポルノグラフィは、大衆メディアの中で、ワイセツ概念や表現の自由、性の商品化といった議論から離れたところの記号として消費される (内田 1987: 122-125)。画像や映像などの戦後視覚メディアとしての性風俗は当初「大人の男の遊び」であったが、高度成長期以降子供部屋など個室が普及するにつれ、そういった私的な空間が性的な遊びの場となり、空間規制で守られてきた青少年がそれらを視聴することが可能となった。また映画からア

ダルト・ビデオへの変化や手軽にポルノ雑誌などを入手できるという日本の現状も女性によるポルノグラフィ消費に拍車をかけたと思われる。

女性とポルノグラフィについて考える場合、性的娯楽に占める性メディアの位置の増加は、空間規制によって囲い込まれていた性文化を、青少年や女性など「大人の男性」以外の人間も享受できるようになったことを意味する。これにたいして、女性向けの性メディアは、1970年代に登場した性的な記事を載せる女性週刊誌を発端に、主に女性誌におけるセックス情報という形をとる。1980年代後半になって初めて、女性向けのポルノグラフィという位置づけのできる「レディース・コミック」が登場、これをきっかけに多ジャンルにわたる本格的な女性向けポルノグラフィが登場する。

また、80年代以降、消費社会における女性の欲望肯定の風潮、ウーマン・リブを経た女性の意識変化などを背景に、女性の性意識にも大きな変容が見られる。とりわけ女性のマスターベーションを肯定する意識の上昇は大きな意味を持った。当時の性革命といわれる状況と並行して性科学を根拠としたマスターベーションの無害性がいわれ、1980年に実施された初めての大規模な女性の性意識調査『モア・リポート』では、マスターベーションを肯定する多くの女性の存在が認知される(モア・リポート班 1983)。

このような変化は、女性向け性メディアが単なる好奇心によるものというだけでなく性欲の解消のためのものであるという意味を持つきっかけとなり、こういった中から女性によるポルノグラフィ消費は具体的な現象としてメディアに取り上げられることとなる。

(2) 資料の選択について

ここでは一次資料として、一般雑誌における

「レディース・コミック」およびその他のポルノグラフィの女性による消費についての言説を扱った記事(レディース・コミックは、大宅壮一文庫の見出しを「レディースコミック」で検索した結果の89件について、女性によるポルノグラフィ消費は、同じく「女性向け AND ポルノ NOT セックス産業」で検索26件について、ともに期間は1984年から2000年)を使用する。

レディース・コミックというメディアは、年齢的にそこでの価値観を共有できなくなった元少女漫画雑誌読者の女性をターゲットにした、「大人の女性向け」のコミック誌であると言われている。大人の女性である登場人物の生活を描くから、性的な匂いのしない少女漫画とは異なり、セックスの描写も見られる。このため、一般的にレディース・コミックイコール女性向けポルノコミックという図式で語られることが多い。

また、性描写以外の部分でも、そのストーリー・内容が現実の女性の意識を反映しているということで、このような側面からのレディース・コミック研究も多く行われている。しかし今回は、内容ではなく、あくまで女性向けの「Hなメディア」としてのレディース・コミックへのまなざしを分析したい。レディース・コミックに関する著作の多い衿野は、主に雑誌メディアにおいてそれらが女性向けポルノグラフィとしてのみ扱われ、批判的な意見をあびせられることにたいして異議をとなえる(衿野 1990)が、本稿では、このようなステロタイプ化を、むしろ「エッチなものを女性が見るようになった」ということへの社会からの視線を、男性中心のポルノグラフィの文化に与えたインパクトの現われととらえ、そこに積極的な意義を見いだしたい。また同様に、レディース・コミック以外のポルノグラフィ(男性向けのアダルト・ビデオ、ポルノ小説、ポルノ雑誌や、新しく登場した女性向けのそれら)の女性による

表 記事内容のフェミニズム的文脈での分類カテゴリー

①ラディカル・フェミニズム的文脈	①-1 女性がポルノグラフィを見ることへのからかい	消費する女性や制作する女性を性的対象として扱う
		エッチなことを好きな女性へのからかい
		読む女性を欲求不満と解釈
		からかいとしての不安
		ポルノグラフィを消費する女性は性的に未熟
	①-2 女性がポルノグラフィを見ることへの批判	女性がポルノグラフィを見ることはよくない
	女性による男性からの批判の想定	
	①-3 女性差別としてのポルノグラフィ	フェミニズムへの言及
②リベラル・フェミニズム的文脈	②-1 女性による男性文化への参入	内容の過激さへの言及
		普通の女性による消費
		男性文化への参入
		男性向けを基準に言及
		男性向けと比べて性表現はおとなしい
		女性向エロは低級
		男性のものである性文化は女性には過激すぎる
		男性文化の領域侵犯への不安
	②-2 ポルノグラフィ消費における男女差の否定	女性が強くなった
		女性は男性よりもスケベだ
男性も女性も性的欲望は同じである		
慣れによって女性がポルノを消費することが当たり前		
③エロティカ的文脈	③-1 ポルノグラフィ消費における男女差	女性固有の消費のありかた側面の強調
		セクシュアリティの本質的な男女差
	③-2 男性向けとは異なる新しい性表現	女性からの積極的な意味づけ
④第三波フェミニズム的文脈	④-1 現実の女性のおかれた立場への言及	女性解放と現実の力関係への言及
		セクシュアリティの変化への驚き
	④-2 女性のセクシュアリティの変化とそれによる男女関係の変容	セクシュアリティの変化への不安
		困惑から学習

消費についても分析の対象とする。

(3) 整理・分析方法

「女性がポルノグラフィを消費する」という現象について、各フェミニズム的文脈においてそれぞれ異なった解釈やそれによる男女関係の変化の想定がなされている。本稿では、現実の社会とのかかわりの中で、このような説明が実際にどの程度まで妥当であるのか、について各文脈に沿って記事を整理していきたい。そこで、まず記事を内容別に34のカテゴリーに分類し、それら

ち、1章で挙げたフェミニズムの3つの立場における女性によるポルノグラフィ消費の説明の文脈に当てはまる24のカテゴリーに分類、さらにそれらを9つの上位カテゴリーに分類する(表)。最終的に、それらを用いて各フェミニズム的文脈での説明を行う。

記事数については図1で、その中での、各フェミニズム的文脈のカテゴリーに該当する記事の割合は図2で示した。なお、図2については、傾向を明確にするため、記事数の安定した1989年以降について、3年ごとの移動平均を出して扱っ

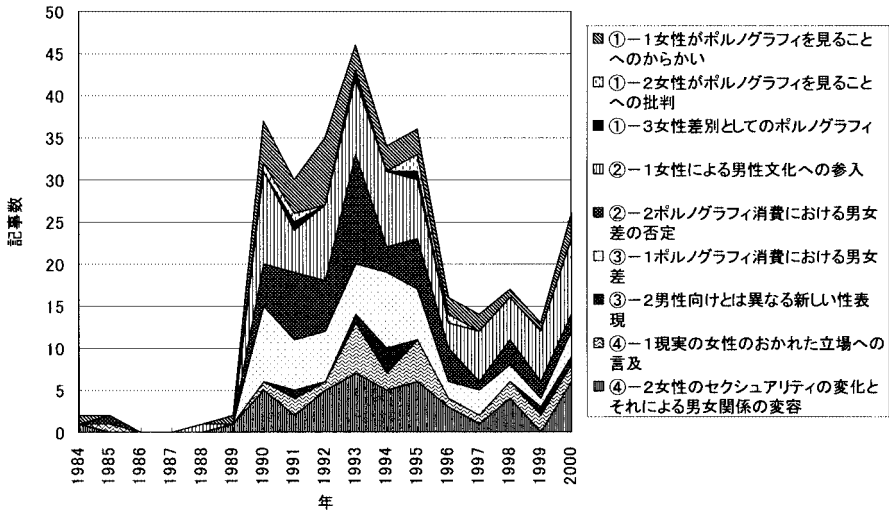


図1 大衆雑誌における「女性によるポルノグラフィ消費」に関する記事の出現頻度（記事数）

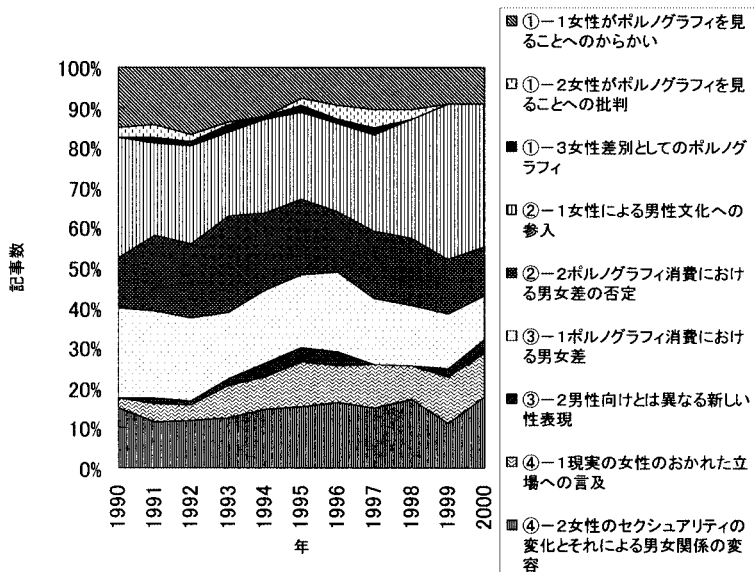


図2 大衆雑誌における「女性によるポルノグラフィ消費」に関する記事の出現頻度（全体の割合）

た。

3 「女性によるポルノグラフィ消費」の現象を説明する各フェミニズム的文脈

(1) 全体の傾向

今回整理した、「女性のポルノグラフィ消費」

観を示す大衆雑誌における記事は、図1のように、1990年以降急激に増加し、1994年をピークに減少している。このことは、1980年代後半に登場したレディース・コミックが、初の女性向けポルノとして驚きを持って社会に受け入れられたが、その後初期の驚きは徐々に緩和され、センセーショナルなものとしての扱いを受けなくなった

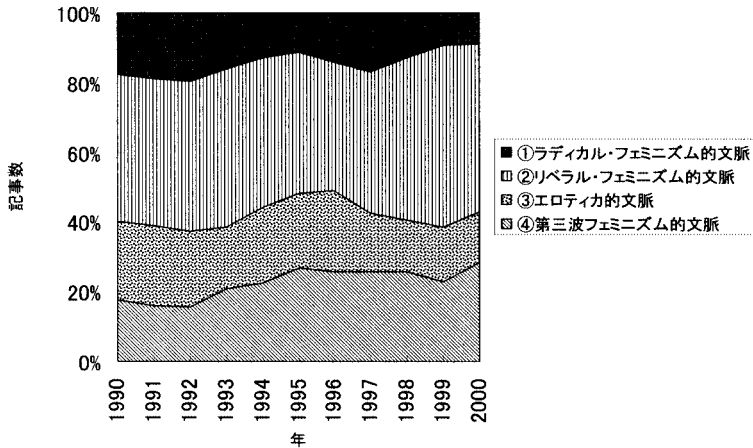


図3 「女性によるポルノグラフィ消費」に関する記事のフェミニズム各論の文脈での分類

ことを意味している。またこの時期、性表現としてのレディース・コミック（レディース・コミックはポルノ的なものだけでなく多くのジャンルがある）のブーム自体も落ち着き、1994年後半には、レディース・コミックの売れ行きを心配する記事もいくつか登場する。

しかし、1990年以降レディース・コミック以外の女性向けポルノグラフィであるアダルト・ビデオや写真集などが登場し始める。1990年代後期には、レディース・コミックの場合と同様、一つの定着した現象として扱った記事がコンスタントに見られる。また、この時期男性向けポルノグラフィを女性が見ることに触れられた記事も登場する。次に、各カテゴリーに該当する記事の、全体の記事数に占める割合（図2）を時系列に見ていくことで、「女性によるポルノグラフィ消費」に各フェミニズムの文脈から考察を加えたい。

(2) ラディカル・フェミニズム的の文脈

各年代における記事中の、フェミニズム各立場による文脈で説明される記事の割合は、図3のようになっている。「女性がポルノを見ることへの批判」（以下「批判」）や「女性差別としてのポル

ノグラフィ」（以下「女性差別」）は、女性の性は男性に支配されているというラディカル・フェミニズム的の文脈で説明されるものであるが、これらの割合は、低いまま推移している。

まず、レディース・コミックといえどもポルノグラフィの一種であり女性差別であるとする記事は、1990年代終わりにはほとんど見られなくなっている。これは、1980年代に盛んであった、ポルノ批判を含めた、ラディカル・フェミニズム的な男女の性的力関係に異議を申し立てる女性運動が1990年代以降下火になり、「フェミニズム離れ」（江原 2000）が起こっている状況とも一致する。

「批判」については、ここでは「女性差別」としての批判とは区別し、女性がポルノグラフィを見るということへの男性社会からの「非難のまなざし」（袴野 1990）を意味する。「批判」が1990年代半ばに少し増加するのは、日本における女性とポルノの関係が海外で話題になり、欧米人から見た日本女性のセクシュアリティの変化への批判という形、すなわちイタリア人へのインタビューにおける「……あのピンカートンの愛したマダムバタフライの大和撫子はどこへ行ったのだ?と、

初めは呆然として悲しかったね」(1996年7月諸君内田洋子)のような記事が見られるためである。一方、女性雑誌など女性側からの言説の中にも、「それに、オジサン週刊誌は『エッチだ』ってたたく。(笑)」(1991年4月20日 non・no 読者へのインタビュー)「『女がHにうつつをぬかすなんて……』などと殿方の反感をかってしまいそうです。」(1995年8月9日 SPA! 酒井冬雪)などのように、男性側からの批判を予想していると思われるものが複数存在する。このことは、「男性が女性の性解放を批判するであろう」という、女性による男性の一種のステロタイプ化を示していて興味深い。しかし、これらのあからさまな「批判」は実際には少なく、代わりに見られるのが、次のような「からかい」の形をとった批判である。

女性への批判に代わって多く見られるのは、「女性がポルノグラフィを見ることへのからかい」(以下「からかい」)である。例を挙げると、「きっと読みながらお嬢様のアソコもヌレちゃったりしてんだらうなァ、と思うだけで、タマリマセンッ！」(『週刊テームス』1999年8月29日)のように、ポルノグラフィを見る女性自身を性的対象に読み替えるものや、女性を欲求不満と位置づけるものなどがある。

女性への批判が、言葉での攻撃ではなく「からかい」の形をとる背景には、「親密な他者」という、男にとっての女の位置づけがあった(江原 1985: 124-125)。それゆえ、あからさまな攻撃を加え完全に対立する関係になることは望まれなかった。また、分析期間である1980年代後半以降は、社会においてタテマエとしての男女平等が浸透しており、解放を求める女性への攻撃は、それに反するものとしてよくない行為という見方が存在していた。同時に、男女を問わず、成人の性的自由をよいものと位置づける価値観(赤川 1999)が存在していたことも考えられる。1980年代

の、『ポップティーン』など過激なセックス記事のある少女雑誌への、また1990年代の援助交際への批判など、少女の性解放は道徳的に「よくないこと」として公然とバッシングを受ける。しかし、「大人の女性の性解放」は、道徳的な問題や女性であるからという理由で批判するのは「大人げないこと」という風潮ができあがっていたのではないだろうか。

しかし、このような性的に「男性に支配されるべき女性が自ら性的商品を楽しむ」ことへの「からかい」も、1990年代後半以降は減少の傾向にある。これは、もはや現象が、興味本位に語られる驚くべきことではなくなった、ということからも説明されるであろうが、後述のエロティカの文脈である、「ポルノグラフィ消費における男女差」の減少や、リベラル・フェミニズムの文脈における「男性の文化への女性の参入」の増加などとの関わりから、次のようにも考えられる。すなわち、もともと男性文化であったものを、セクシュアリティの異なる(ラディカル・フェミニズム的文脈では男性に支配されている)女性が楽しむという構図から、次第に男女の差異は関係なく、ポルノグラフィが消費されるという構図への変化である。「からかい」の減少は、かつて揶揄され、消費される「弱者」であった「性的に楽しむ」女性が、若干ではあるが市民権を得たことを示している。このことは、女性による男性文化の享受を意味し、次のリベラル・フェミニズム的文脈にも関係する。

(3) リベラル・フェミニズム的文脈

女性が男性並みになることを女性解放とするリベラル・フェミニズム的文脈としては、「ポルノグラフィ消費における男女差の否定」(以下「男女差の否定」)と「女性による男性文化への参入」(以下「男性文化への参入」)をカテゴリーとした。

図3では、上で少し述べたとおり、「男性文化への参入」に該当する記事の割合は全体に高く、新しい現象としての驚きが一旦落ち着いた1990年代半ばには一旦減少するが、再び緩やかな増加の傾向にある。一方「男女差の否定」は減少の傾向にある。「男女差の否定」は、女性であるゆえ男性とは異なる女性向けのポルノグラフィを、男性とは異なる方法で消費するというのではなく、女性も男性と同じものを同じ方法、目的で消費するということである。「男はいつもヤラシイことを考えている、とすれば女だってヤラシイことを考えているはずだ。」(『ダ・ヴィンチ』1998年7月 呉智英)というような、性欲の量的な同一性に関するもの、また「女は男の裸、見たいのよ。バックヌードにとても憧れてる。男性もヒップの線を意識したほうがいい。それと『抱かれる男』がウケるといいうのも注意すべきね。」(『FLASH』1992年2月25日 東さやか)、「女だって、男の人の『お●んちん』見れば感じるのよっ!」(『ダ・ヴィンチ』1999年8月1日 春乃かおり)というような、消費の質的な差異の否定に関する記事がこれに該当する。「男女差の否定」の減少は、同じくリベラル・フェミニズム的文脈である「男性文化への参入」の増加とは矛盾するが、同様に減少傾向にある、次のエロティカ的文脈である「ポルノグラフィ消費における男女差」と対になっていることを考えると、男女の差を論じること自体の意味の希薄化を示しているのかもしれない。

一方で増加の傾向にある「男性文化への参入」すなわち女性が男性並みに「男性」文化を享受するようになったことと、それへの男性の反応には、まず「だけどころなものは、一部の色情狂的女性が密かに愛読しているだけだろう、なんて思うのは甘い。」(『週刊現代』1990年6月30日)などのように、「異常」な女性ではなく、ごく普通の身近な女性がマスターベーションをするためにポ

ルノグラフィを消費するということへの驚きを見受けることができる。このことはまた、ラディカル・フェミニズムにおける男性支配的なセクシュアリティの構図である、娼婦性を持つ「特殊な女性」と「普通の女性」を分断する、家父長制的な性の二重規範が崩壊しつつあることを示しているともいえる。

また、女性の消費するものとしてのポルノグラフィが、男性の消費するものと同様、またはそれらよりも過激であることへの驚きも見受けられ、「ポルノ小説や劇画を見慣れた男でも、『おっ、何じゃこれは!?』と思うほどなのだ。」(『週刊実話』1997年11月13日)のように男性向けのポルノグラフィを比較対象にする記事も多く見られる。

先述の「からかい」の理由の一つとして挙げた「表面的な男女平等思想の浸透」もまた、このリベラル・フェミニズムのレベル、すなわち制度的な、平たくいえばタテマエとしてのレベルで起っているということができる。リベラル・フェミニズム的文脈の増加は、このようなラディカル・フェミニズムのような現実の力関係を問うものではない「リベラリズム的な機会の平等」が政策レベルでも意識のレベルでも推進されている現在の状況とも共通する。また、消費社会と個人主義化も、とりあえず市場に存在する男性並みの快楽を求める女性の増加に寄与しているのではないだろうか。

このように、女性もまた男性と同様に快楽の文化を享受するという、リベラル・フェミニズム的文脈での女性解放が現代においては多く受け入れられているといえる。セクシュアリティの男女差は、ラディカル・フェミニズム的文脈では女性の連帯の根拠とされていた。しかし、「男女の差異」は、一方でそれを根拠に女性差別が正当化され、現実には差別の助長としての「差異の再生産」(吉

沢 1993)」も行われているという表裏一体の危うさを持つ。「差異」が否定されるという意味では、そこに単なる「女性の男性化」を超えた女性解放的意義を認めることも可能である。また、ポルノグラフィの文化における男性ホモソーシャルが、女性の参入によって揺るがされるという意義も考えられる。しかし一方で、先述のような現実の性的不平等の温存とともに、「体位も女性(逆)上位のモノに人気が集まっています。男性に対して優越感を持てるところがいいんでしょうね」(『週刊大衆』2000年1月31日)のような男女の立場の転換が暴力的なポルノグラフィを認める根拠となるという本末転倒な意見を招く可能性をも孕んでいる。

(4) エロティカ的文脈

エロティカとしての「女性の消費するポルノグラフィ」を示す文脈では、「男性向けとは異なる新しい性表現」(以下「新しい性表現」)「ポルノグラフィ消費における男女差」(以下「男女差」)を挙げる。両カテゴリーともに、既存の男性向けポルノグラフィの内容や、暴力的に性欲を満たすだけという男性の消費のありかたに疑問を持つというものであるが、前者は、女性差別的ポルノグラフィの否定というエロティカ概念の第一義的な意味にもとづくものであるが、とりあえず何か新しいあり方を構築していこうという文脈である。一方後者は、女性だから、男性とは異なった女性独自のポルノグラフィを、女性独自の目的、方法で消費するということを意味する。

「新しい性表現」にあてはまる記事は、全体に少なく、図1に示されたレディースコミック全盛期の1990年代半ばに増加するが、その後また減少する。1990年代後期に再び見られるが、これらはレディース・コミック以外の女性向けポルノグラフィを評価したものである。「それが男性向

けの官能劇画誌とは異なる性表現を持ち得たとすれば、それは素晴らしいことではないか。」(『宝島30』1994年8月)のように、新しいポルノグラフィのイメージが作られつつあり、それらを肯定的に見る記事が見られる。今回の分析では、「女性による」ポルノグラフィ消費の現象にもかかわらず、男性側の言説が全体的に多くを占めていたが、1990年代後期のレディース・コミック以外の女性向けポルノグラフィを肯定的に見る言説に限っていえば、女性側からのものが多い。女性向けポルノグラフィにたいし、女性側から述べられる意見では、「従来のポルノの多くは、激しく抗う女性を無理やりレイプするとよがり出すとか、おぞましい愛撫で女性がクライマックスに達するとか、女性の実感からかけ離れていた。」(『AERA』1998年1月5日 松原慶)、「こんなビデオじゃあ、女の子はやっぱり満足出来ない!」(『ダ・ヴィンチ』1999年8月1日 春乃かおり)というように男性向けが否定されている。これらは、数は少ないが男性雑誌においても見受けられ、今後さらにこの傾向が広がることが期待される。

「男女差」には、まずポルノグラフィの内容の差異に言及され、男性から「やや物足りなさを感じたりもするのだが……。」(『アサヒ芸能』1994年4月7日)「男だと立ちましえーん!」(『SPA!』1995年5月31日)という評価が与えられる。また、内容の差異の要因として、「なるほど、〈男女の生理の違い〉を踏まえないといけないワケだ。」(『アサヒ芸能』1994年4月7日 あべしょうこ)のように、男女の本質的な性的差異が語られる。

「男女差」の強調は、前述のようにリベラル・フェミニズム的文脈では差別の根拠の再生産であると同時に、ラディカル・フェミニズム的文脈では男性とは異なる女性独自のセクシュアリティの賛美となる。これらは1990年代後期から2000年にかけて減少の傾向にあるが、これは何度も繰り返

返すように、リベラル・フェミニズム的「男並み」女性解放が受け入れられる時代であることを示している。また、エロティカはラディカル・フェミニズムから派生し、男性による暴力的、差別的ポルノグラフィをエロティカが駆逐することを目的の一つに掲げる立場でもある。単に女性独自の視点というだけでなく、消費する主体としての女性が具体的に、新しい性的イメージを作り出していくのはよい傾向であるといえるが、現実の男女の性的力関係への関心は低く、これらの絶対数は少ない。

(5) 新しいフェミニズム的傾向

上にあげた、「女性によるポルノグラフィ消費」に関する記事のフェミニズム的視点からの整理において現在の女性のセクシュアリティをめぐる状況にはリベラル・フェミニズム的な「男並み」になることを目指す女性解放が支持されている傾向が示された。しかし、現実には、女性によるポルノグラフィ消費はまだマイナーな現象である。このような文脈から「現実の女性のおかれた立場への言及」（以下「現実の立場」）がなされる記事もある。これらは、先に挙げた各フェミニズム的立場を「第二波フェミニズム」と呼ばれるのにたいし、「第三波フェミニズム」と呼ばれる新しいフェミニズムの文脈で説明される。「第三波フェミニズム」では、フェミニズムを「思想」から解き放ち一人ひとりの女性の日常の経験に根ざした実践として生かされるもの（牟田 2001）と考える。「現実の立場」としては、「女性の社会進出と性の情報公開が進み、女性が男性並みに自らの性を主張し始めた。だがこれは大変なことでもなんでもない。極めて当たり前のことである。」（『SAPIO』1993年8月12日）や「とりあえず、男性が支配している社会だから、男性の性欲を刺激する写真の技術が発達しているだけではないかと思

うんです。」（『ダ・ヴィンチ』1999年8月1日 春乃かおり）のようなものが見られる。

また、第三波フェミニズムでは、女性の個人の体験や、従来はフェミニズムによらない女性の変化であると見なされてきたものに「フェミニズム」的意義を見出す可能性を重要視するが、中でも「女性のセクシュアリティの変化とそれによる男女関係の変容」（以下「セクシュアリティの変化」）は、それにあてはまるもっとも適当な現象であるといえる。「セクシュアリティの変化」としては、「男の『発射快感』に終始する馴れ合いのセックスは、女の肉の疼きを癒しきれない。女はもうそんな男の横暴に黙っていないのだ。」（『FLASH』臨増1995年7月14日）のような男性優位の性文化に異議を唱えるものや、それへの男性の反応として「現実の同世代の男が頼りなく、物足りなく感じ始めた女のこたちの欲求不満やストレスを解消する道具になっているのだ。…（中略）…こういうレディースコミックの構造に興奮し、自分を投影して満足する女の子たちとほくたちはつき合うわけだ。」（『スコラ』1992年6月11日）のような不安を示すもの、また「男もレディースコミックを読めば、より優雅なプレイボーイになれるかもしれない。」（『週刊宝石』1990年6月7日）「女を知ろうと思ったら、エロ本のハウトゥより絶対レディースコミックだと思いますよ。」（『週刊宝石』1993年10月21日 西川その子）という変化した女性のセクシュアリティを知るために「女性向け」ポルノグラフィで学習しようとするものが挙げられる。

男性が女性の性を知るきっかけという意味合いを女性によるポルノグラフィ消費現象が持つ背景には、女性に快樂を与えることを男性としての価値と位置づける性的価値観の存在（田中 1999：187）や、セックスがマニュアルによって煽られる社会（芹沢 1991：200）の影響があることも考

えられる。すなわち男性優位の価値観を持つ性情報に代わり、女性向けポルノグラフィが女性へ快樂を与える能力が新たな資源となってポルノ文化が再編されていく恐れもあるといえる。

しかし、男性的価値観への疑いは、男性優位の文化の揺らぎともとることができ、また男女の性的なコミュニケーションが行われているということもできる。また、フェミニスト以外の女性の性意識の変容が求める、男性の意識転換 (Giddens 1992=1995: 232) が少しずつではあるが実現しつつあるということもできるのではないだろうか。

「現実の力関係への言及」はあまり増減を見せず推移しているが、「セクシュアリティの変化」は増加の傾向にある。エロティカの文脈での「新しい性表現」にもあてはまることであるが、従来のフェミニズム的文脈ではなく（非男性向けポルノグラフィという点ではエロティカで説明できる部分もあったが）、「男並み」になる女性解放が支持される一方で、日常的で動的なフェミニズム的意義を持つ現象が登場しているといえる。

4 結論

日本における「女性によるポルノグラフィ消費」の現象をもっとも適切に説明するフェミニズム各論の文脈を明らかにするため、文脈に該当する記事の出現頻度の傾向を整理してきた中で示されたことは、以下のとおりである。

まず、大きな傾向として、日本における「女性によるポルノグラフィ消費」観を説明するフェミニズム的文脈として、従来ポルノグラフィについての説明で多く用いられていたラディカル・フェミニズム的傾向や、女性向けの「ポルノグラフィ」に女性固有の意味を見出すエロティカ的な傾向は減少し、その代わりにポルノグラフィを見ること自体を肯定するリベラル・フェミニズム的傾向が1990年代を通して多く、少しずつではあ

るが増加しているということが出来る (図3)。

「女性差別としてのポルノグラフィ」の減少と「男性文化への女性の参入」の増加 (図2) は、「女性によるポルノグラフィ消費」が日本において、「女性差別」の肯定とは捉えられず、男性と同じ快樂の文化の女性による享受であるという側面が強いということを示している。このことは、日本における男女平等が、現実の力関係の問い直しではなく、女性が男性と同等の機会を得ることで達成されるというリベラル・フェミニズム的意識のもと成り立っている昨今の現実とも共通する。

また、「批判」や「からかい」の減少 (図2) もまた、ラディカル・フェミニズム的文脈で説明される社会通念が揺らいでいることを示している。すなわちそれは、男性とは異なるセクシュアリティを持つゆえ女性はポルノグラフィを見るべきでないとされている社会通念である。ここでの「批判」「からかい」は、男女でセクシュアリティが異なることに基づいたものであるが、それはポルノグラフィ消費やセクシュアリティにおける「男女差」の減少にも現れている (図2)。しかし、ポルノグラフィ消費における男女の機会平等としての「男女差の否定」もまた減少の傾向にある。このことは、男女差という概念そのものの意味が希薄化していることを示しているのかもしれない。

先述の「男女差」とともに「男性向けとは異なる新しい性表現」がエロティカ的文脈のカテゴリーであるが、これもまた全体的に低いまま推移している。このことから、「女性によるポルノグラフィ消費」は女性固有の現象ではなく、男性文化への女性の参入であると捉えられる傾向があることがわかる。

もう一つの大きな傾向としては、第三波フェミニズム的文脈の増加 (図3) がある。「セクシュ

アリティの変化と男女関係の変容」は、「女性によるポルノグラフィ消費」にたいする「からかい」や「批判」に代わる男性の反応として捉えることができる。また、リベラル・フェミニズム的な、「ポルノグラフィを見る機会の男女平等」は社会に受け入れられたものの男性と同様の消費は不可能であるという現実が、「現実の女性の立場への言及」の増加（図2）の要因となったとも考えられる。

日本における「女性によるポルノグラフィ消費」の現象には、女性が男性と同様の文化を享受するという、リベラル・フェミニズム的な男女機

会平等としての側面が強い。しかし、「男女の差異」へのこだわりの減少は、リベラル・フェミニズム的文脈における、一つの性を基準にする意味での女性の「男性並み解放」だけではなく、性別ではなく個人を基準としてセクシュアリティが考えられる第三波フェミニズム的意義を持つ傾向を示している。「女性によるポルノグラフィ消費」は、女性がセクシュアリティについて考え、男性がその変化に歩み寄るといった新しい男女関係の構築へのきっかけであるということもできるのではないだろうか。

【参考文献】

- 赤川 学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。
江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房。
杉野未矢, 1990, 『レディース・コミックの女性学』青弓社。
Giddens, Anthony. 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism* (=1995, 松尾精文・松川昭子訳, 『親密性の変容』而立書房.)
ホーン川嶋瑤子, 1996, 「日本の大衆ポルノ文化のジェンダーイデオロギー」『日米女性ジャーナル』No. 20, 日米女性センター。
———, 1999, 「言説、力、セクシュアリティ、主体の構築」『ジェンダー研究』第2号, お茶の水女子大学ジェンダー研究センター。
金塚貞文, 1996, 「消費社会のセクシュアリティ」『岩波講座現代社会学第10巻 セクシュアリティの社会学』岩波書店。
笠間千浪, 2001, 「ジェンダー秩序による〈セクシュアリティ〉編成とフェミニズム言説」神奈川大学人文学研究所編『ジェンダー・ポリティクスのゆくえ』勁草書房。
加藤秀一, 1998, 『性現象論』勁草書房。
MacKinnon, Catharine A. 1990, "Liberalism and the Death of Feminism," Dorchen Leidholdt and Janice G. Raymond ed., *The Sexual Liberals and the Attack on Feminism*. (=ポルノ・買春問題研究会訳「リベラリズムと『フェミニズムの死』」[<http://app-jp.org/library/macKinnon-death.html>])
モア・リポート班, 1983, 『モア・リポート』集英社。
守 如子, 1999, 「〈ポルノグラフィ〉批判とポルノを消費する経験の間で」『女性学年報』20。
村瀬ひろみ, 1996, 「日本のポルノ状況と『性教育』」『女性学年報』17。
牟田和恵, 2001, 「近代日本のフェミニズムの再検討—メディア・イベントとしてのフェミニズム」竹中恵美子・久場嬉子監修, 三宅義子編『叢書 現代の経済・社会とジェンダー第3巻 日本社会とジェンダー』明石書店。
Myers, Kathy. 1987, "Toward a Feminist Erotica," Rossemery Betterton ed., *Looking on: Images of Feminity in the Visual Arts and media* (=榎 正行訳「フェミニスト・エロティカの方へ」1990, 上野千鶴子他編『ニューフェミニズムレビュー vol. 3 ポルノグラフィ—』学陽書房.)
永井良和, 1995, 「『遊び空間』の変容」『岩波講座現代社会学第20巻 仕事と遊びの社会学』岩波書店。
小形桜子, 2001, 『モア・リポートの20年』集英社。
岸沢俊介, 1991, 「少女たちの迷走する性」大塚英志編『少女雑誌論』東京書籍。

- Steinem, Gloria. 1978, "Erotica and Pornography: A Clear and Present Difference," Ms. (=ポルノ・買春問題研究会訳「エロチカとポルノグラフィ―明白で実在する違い」. [<http://app-jp.org/library/steinem.html>])
- 田中雅一, 1999, 「射精する性―男性のセクシュアリティ言説をめぐって」西川祐子・荻野美穂編『共同研究 男性論』人文書院.
- 内田隆三, 1987, 『消費社会と権力』岩波書店.
- 渡辺桃子, 1992, 「ポルノ賛成?ポルノ反対?」上野千鶴子他編『ニューフェミニズムレビュー vol. 3 ポルノグラフィ―』学陽書房.
- 吉澤夏子, 1993, 『フェミニズムの困難』勁草書房.